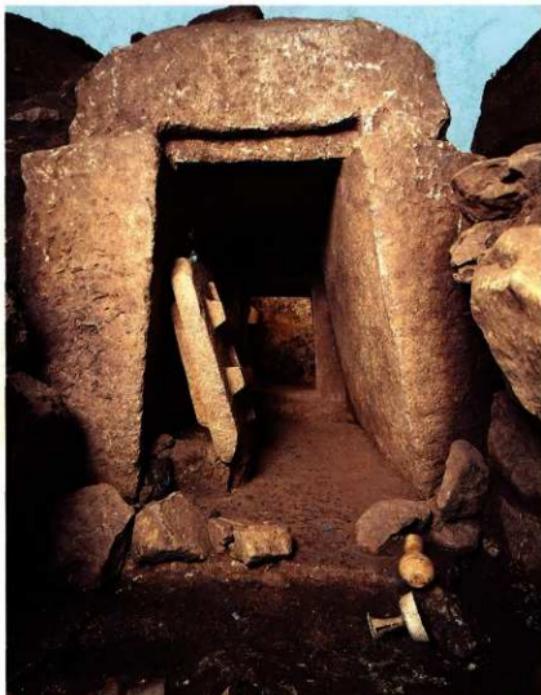


## 向山古墳群発掘調査概要報告書



平成8年3月

松江市教育委員会  
財団法人松江市教育文化振興事業団

松江市文化財調査報告書第71集



# 向山古墳群発掘調査概要報告書

平成8年3月

松江市教育委員会  
財団法人松江市教育文化振興事業団

## 例 言

1. 本書は平成7年度において実施した個人住宅建築予定地にかかる向山古墳群の発掘調査概要報告書である。
2. 本発掘調査は松江市教育委員会から委託を受け、財團法人松江市教育文化振興事業団が実施したものである。
3. 調査の組織は下記のとおりである。

主査者 松江市教育委員会

事務局 教育長	瀬訪 秀富
生涯学習部長	伊藤 博之
文化課長	中林 俊（平成7年6月まで）
"	柳原 知朗（平成7年7月から）
文化財係長	岡崎雄二郎
実施者 財團法人松江市教育文化振興事業団埋蔵文化財課	
理事長	大塚 雄史
事務局長	佐藤千代光
調査係長	中尾 秀信
調査者 調査担当者	瀬古 謙子
調査補助員	門脇 千鶴

4. 調査の実施に当たっては、次の方々の指導と協力を得た。記して感謝の意を表する次第である。

川原和人（島根県教育庁文化財課主幹）、広江耕史（同文化財課文化財保護主事）、山木 清（島根大学名誉教授）、渡辺貞幸（島根大学法文学部教授）、池田満雄（島根県文化財保護審議会委員考古担当）、大谷亮（島根県立八云立つ風上記の丘資料館学芸主事）、勝部武夫（上地所有者）、吉野光徳（同）、中島 茂（同）、大塚初重（明治大学文学部教授）、和田晴吾（立命館大学教授）、牛島 茂（奈良国立文化財研究所）、島根県立埋蔵文化財調査センター、島根県立八雲立つ風上記の丘資料館、出雲考古学研究会、横穴墓研究会（順不同）

5. 出上遺物は松江市教育委員会文化課で保管している。

6. 本書の執筆・編集は瀬古が行った。

### 文化財愛護シンボルマークとは……

このマークは昭和41年5月26日に文化財保護委員会（現文化庁）が全国に公募し、決定した文化財愛護の運動を推進するためのシンボルマークです。

その意味するところは、左右にひろげた両手の掌が、日本建築の重要な要素である半柱、すなわち半と横の組み合わせによって全体で軸を支える腕木の役をなす組物のイメージを表わし、これを三つ重ねることにより、文化財といふみんなの遺産を過去・現在・未来にわたり永遠に承継していくというものです。



文化財愛護  
シンボルマーク

## 目 次

はじめに .....	1
1号墳の調査	
墳丘規模と形態、外部施設 .....	5
石室の裏込め石と盛土 .....	7
墓域の設定 .....	7
基盤上の祭祀 .....	7
1号墳の石室 .....	8
石棺 .....	11
閉塞石 .....	12
石室の細部と石組 .....	13
前庭～石室内の堆積土と遺物の出土状況 .....	14
前庭～石室の調査の経過 .....	16
掲き出された遺物 .....	17
前庭部初葬時の遺物 .....	19
2号墳の調査 .....	23
その他の調査 .....	25
小結 .....	26

## はじめに

本遺跡は松江市街地南東、大庭町地内の丘陵南向斜面中腹に存在する。本遺跡が発見されたのは昭和45年に当時の土地所有者が宅地造成を行った際、石棺の大井石らしきものが発見されたことに始まる。この時工事は中止され、向山1号墳として発見届が提出された。更にその後の分布調査によって隣接地に新たに方墳1基と前方後方墳推定地が1箇所発見され、合計3基の「向山古墳群」として松江市遺跡地図に記載された。

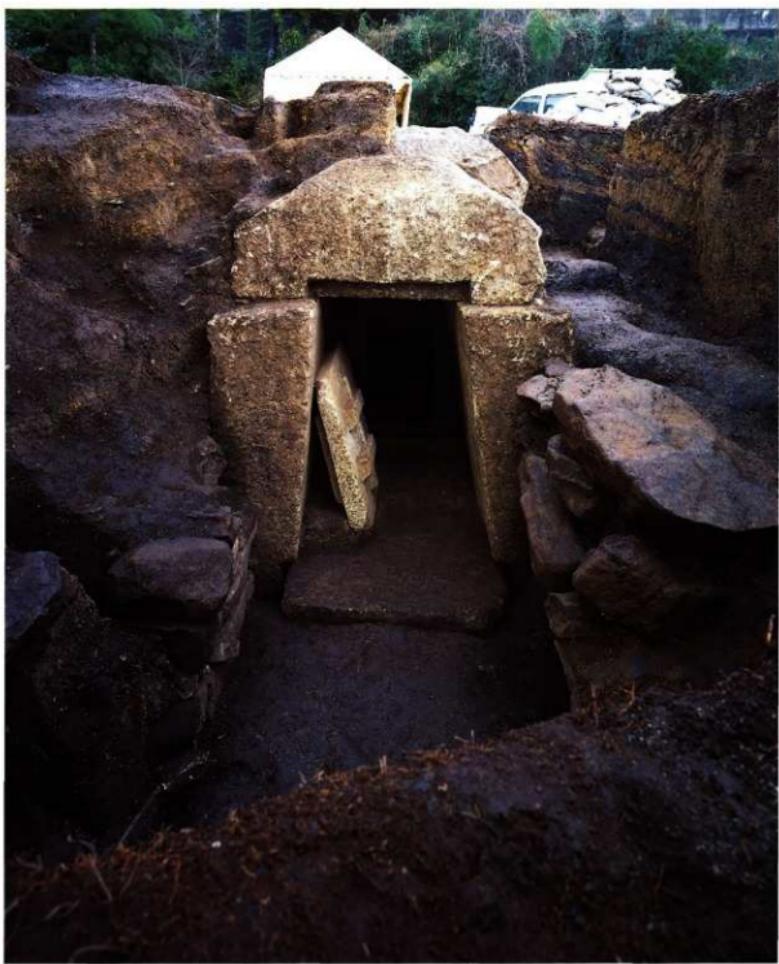
その後平成5年度において、当地に個人住宅を新築する計画があり、遺跡分布調査依頼書が提出された際に現地を踏査したが、予定地は以前の造成工事によって一様に削平されており、古墳の墳丘はわずかに南側に残るのみで1号墳の墳丘範囲が把握できず、また以前発見された石棺大井石の位置も不明であったことから、試掘調査によって1号墳の正確な位置と規模を確認する必要が生じた。

平成6年度の試掘調査の結果、昭和45年に発見された石棺の大井石は、石棺式石室の玄室大井石であった事がわかり、更に玄室に取り付く羨道部は人頭大の石により完全に閉塞された木蓋據の大型古墳であることが判明した。このことから、将来的には現状保存と整備が必要であると判断された。

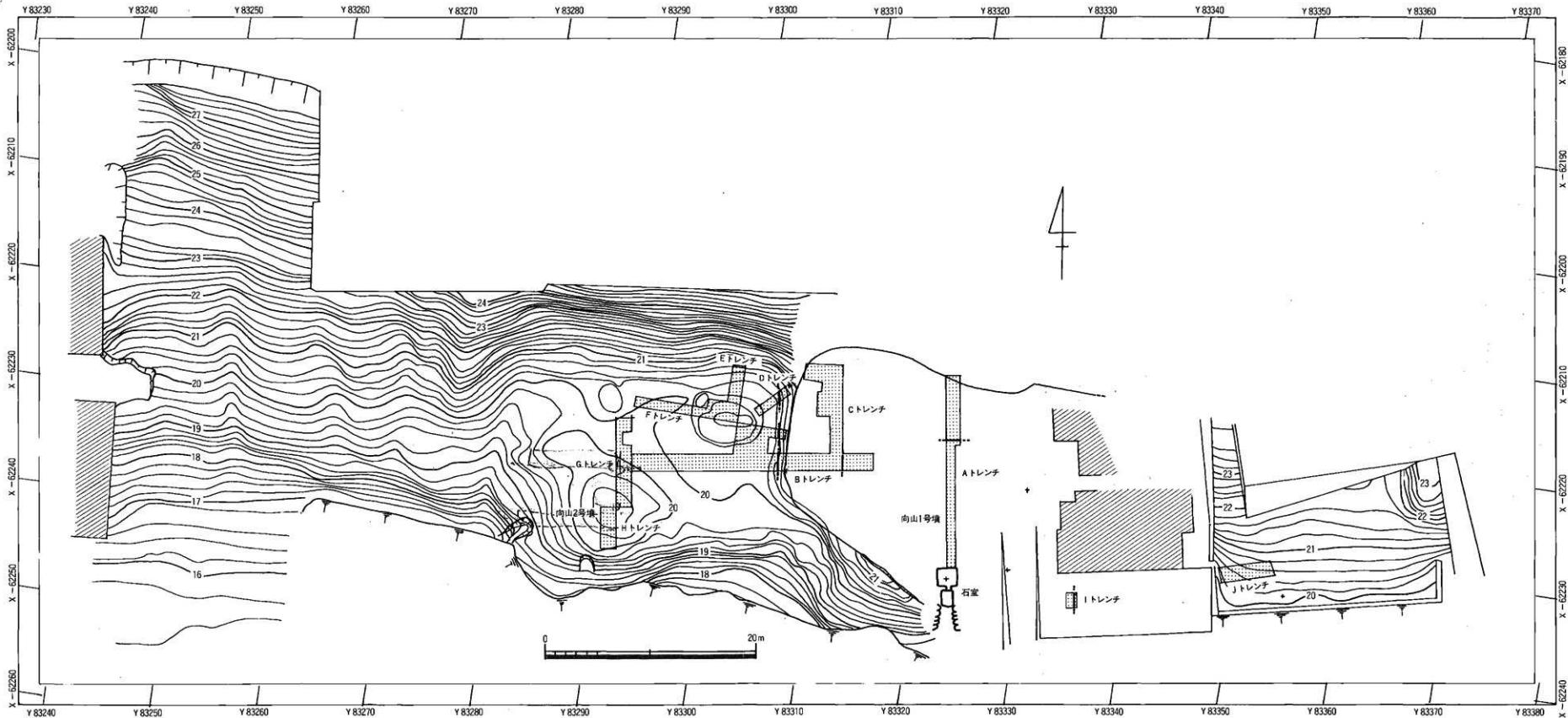
平成7年度においては、前年度の調査で判然としなかった1号墳の墳丘規模、墳丘形態の確認と、石室内部の調査、及び2、3号墳の範囲確認調査を目的として平成7年5月29日から平成8年2月29日までの9ヶ月間調査を実施した。



第1図 向山古墳群位置図(1:100,000)



向山 1 号填石室全景



第2図 向山古墳群平面図

# 1号墳の調査

## ★墳丘規模と形態、外部施設

1号墳の墳丘は昭和45年の重機掘削により少なくとも人の背丈程度は削り取られたと言われており、調査前の現状は標高20mあまりの平坦面をなしていた。

平成6年度の調査時に設定された石室主軸の北側トレンチを延長したAトレンチでは、玄室から北へ13m地点で墳裾と見られる土層の変化があり、その外側（北側）に子持壇約3個体分がおびただしい破片となって発見された。このことにより南北の大きさは前部の未調査部分まで含めると20m以上になるものと考えられる。

また石室の北約10mでAトレンチに直交するBトレンチを設定し西側の墳裾を求めて調査したところ、石室主軸線より西へ11m余りの地点で昭和45年当時に削平された墳丘の立ち上がりが見つかったが、墳丘基盤の削り出しあるに西へ5m程度広がり、主軸より16m地点まで続くことがわかった。このテラス部分に本来盛上があったのかどうかは確認できなかった。Bトレンチ拡張区のa地点とDトレンチのb地点においても地山の削り出しが認められ、その斜面途中と報付近の地山の風化層中に倒れ込んだ状態の子持壇が見つかった。いずれも石室主軸より約16mの距離にある。これらの結果を総合して考えると石室より西側の状況は約16mの距離に1段目のテラスがあり、その5m内側から2段目の墳丘が立ち上がる2段築成の方形を呈することが考えられる。

この2段築成の可能性は石室の東に隣接する中島氏家の庭の坪掘調査（Iトレンチ）において、主軸より約12mの地点で盛土が落ち込んでいることからも推定できる。

中島氏家の東に隣接する主軸より25mの公園のトレンチ調査（Jトレンチ）においては、墳丘はここまで及んでおらず自然の山の堆積層が確認されたのみであった。



第3図 向山1号墳トレンチ配置図



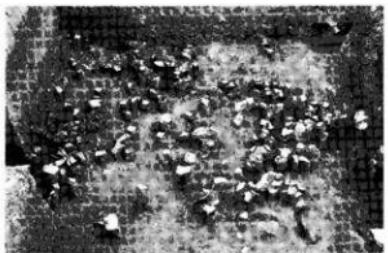
B レンチ拡張区の墳端と子持壺出土状況



D レンチ墳端と子持壺出土状況



A レンチ子持壺出土状況



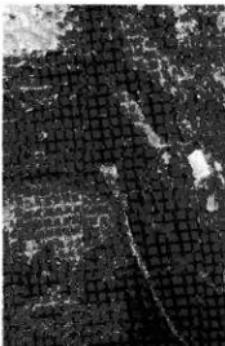
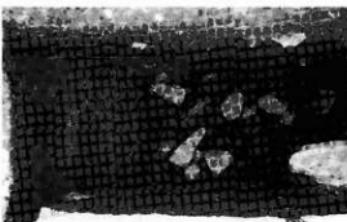
B レンチ拡張区子持壺出土状況



第4図 向山1号墳Aレンチ土層断面図

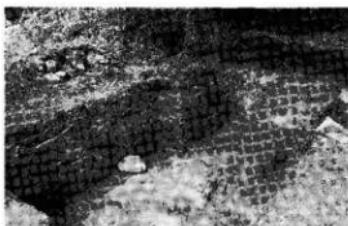
### ★石室の裏込め石と盛土

石室の壁石の外側には10~40cm大の礫・転石が大量に積み上げられていた。石室のささえと排水の役割を果たしていたものと考えられる。

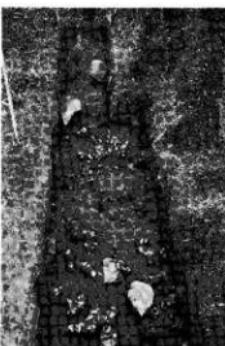


### ★墓域の設定

AトレンチとCトレンチの北端で地山をカットして墓域を設定したと考えられる段が発見された。石室の横軸線からは19m前後の距離にある。



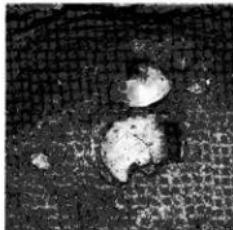
Cトレンチ



Aトレンチ

### ★基盤上の祭祀

石室の背後約7mの墳丘基盤上で、少し打ち欠いて丸めた状態の青メノウと七飾器の杯と碗が伏せて置いてあるのが発見された。古墳を築造する前の祭祀に使われたものではないかと考えられる。



Aトレンチ

## ★ 1号墳の石室

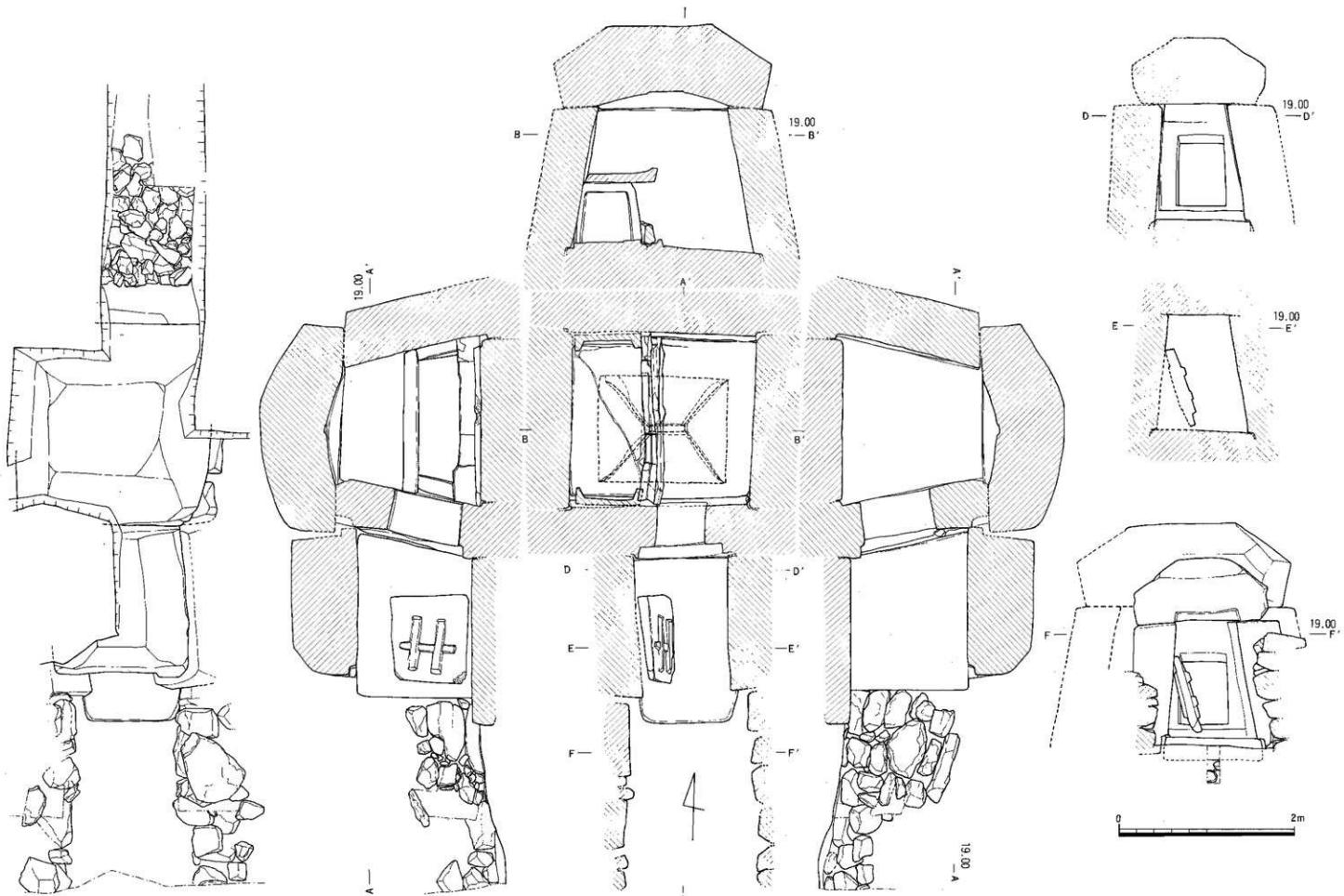
1号墳の内部主体は凝灰岩の一枚石を組み合わせて構築した玄室と羨道に自然石を積み上げた前庭部のつく石棺式石室で南に開口する。

玄室の内法は幅2.05m、奥行き1.97m、高さ1.78mを測る。各壁は内傾し、壁の組み合わせは側壁を前壁と奥壁で挟むタイプである。各壁を組み合わせるためのくり込みは前壁と奥壁に曲線的に施され、側壁にはそれに見合うように面取が行われている。両側壁は下端を逆L字状にくり込んで床石に掛けしており、一方前壁と奥壁は下端を逆L字に削り出して床石と突き合させ、この部分のレベルを少し低くして溝状の構造にし排水の機能を持たせている。また玄室内には左壁に沿って石棺を組み込んでいる。玄室の床石の左側を一段高く削り出して石棺の床面とし、溝を切って仕切り石をはめ、内側を「コ」の字状にくり込んだ側石を立て、一枚石の大井石を乗せて棺構造としている。前壁には玄門が右に寄せてくりぬかれ、閉塞石を受けるためのくり込みが左右と下側に設けられている。上側にはくり込みはないが割り付け線が残っており、付近の加工痕を観察した結果、何かの手違いか設計変更により上部が削り落とされたものであることがわかった。玄室の大井石は内外面共家形に加工され平入りである。内面の加工は各壁や石棺に比べるとかなり雑であり、仕上げの工程を経ていないと思われる。

羨道の内法は幅1.05m、長さ1.85m、高さ1.32mを測る。左右の側壁は内傾し、羨門側では下端のくりこみ部分が床石にわずかに掛かっている。床石と側壁石の下には人頭大の石が敷かれており、石室の安定と排水の機能を果たしているものと考えられる。天井石の外面は家形の一端を切り落とした形に加工されており妻入りである。玄門に接する側には段を削り出して玄室前壁上部の段に乗せるべく設計されていたようであるが羨道全体が予定より低くセットされてしまつたためうまく乗らず、玄室天井石との隙間に粘土と凝灰岩のかけらを詰めて日張りを施している。内面は半天井に作り、前面には閉塞のためのくり込みが施されている。左側壁には門状の陽刻をもつ玄門の閉塞石が上部を入り口側にして立てかけられていた。

前庭は自然石を両側に積み上げて側壁を構成している。右壁が6段、左壁が4段現存する。2度目の進入時に前庭の堆土を掘削した際、側壁が崩れてたくさんの石が落ち込んだものようである。地形の制約により側壁の前端は確認していない。

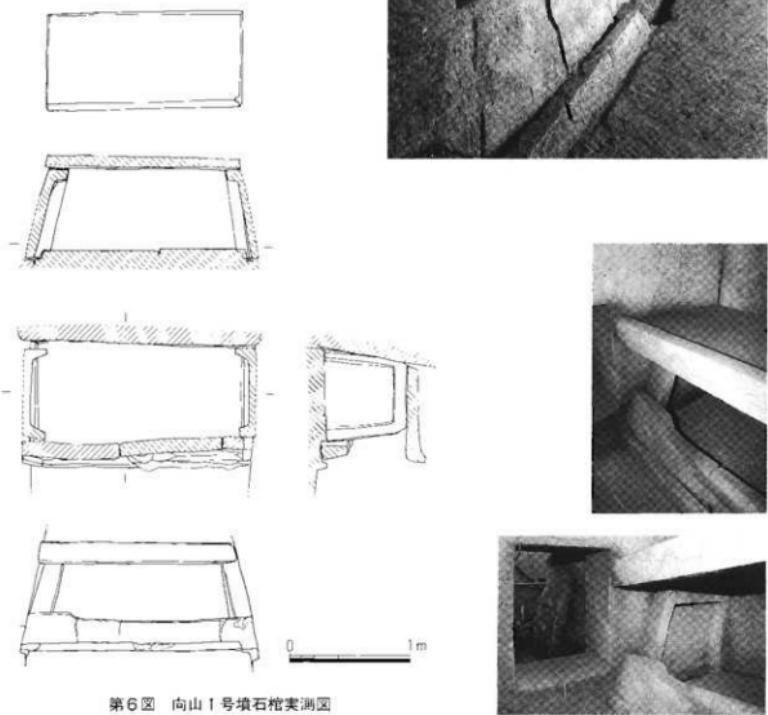




第5図 向山1号墳石室実測図

## ★石 棺

玄室の左壁に沿って組み込まれた石棺は、床が玄室と一体成型されて玄室床面より一段高くなっている。玄室床面との境には溝を切って浅くU字状に加工された仕切り石がはまっている。両側石は内側が「コ」の字状にくり込まれたもので、下端を丸みを帯びた逆L字状に加工して床石に掛けている。側石の上には板石の上部6cmばかりを平坦に作り、その奥を自然に丸みをつけて低くした特異な形状の天井石を乗せている。石棺の内法は幅180cm、奥行77cm、高さ65cmを測る。



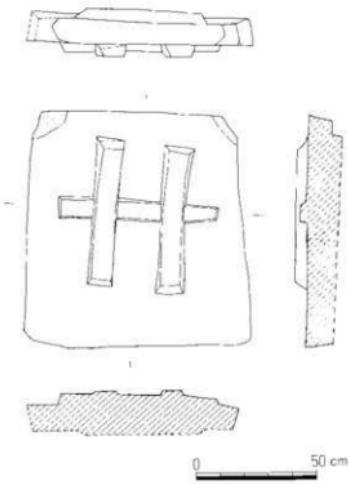
第6図 向山1号墳石棺実測図

## ★閉塞石

凝灰岩の板石を用いて、表面には門状の陽刻を施し、裏面には玄門のくりぬき部分にはめるための削りだしを設けたものである。高さは98cm、幅は上辺86cm、下辺95cm、厚みは9~13cmある。

表面の門状の陽刻は縦棒と横棒の高低差があり、横棒は右が細くなっている左から差し込んだ状態が写実的に表現されている。

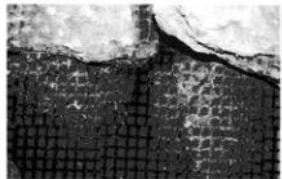
門状の陽刻をもつ閉塞石は宍道湖南岸を中心に分布し、これで7例目であるが、裏面に削りだしをもつものは他に見られない。



第7図 向山1号墳玄門閉塞石実測図

## ★石室の細部と石組

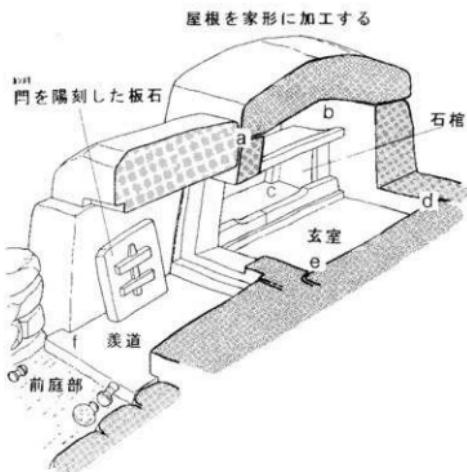
1号墳の石室は設計段階で非常に緻密に組み立てようとした意図が随所に見て取れる。床石を石棺と一体に作って石棺を組み込み、玄室、羨道、石棺とも側壁石はくり込みをして床石に掛け、羨道と玄室の天井石をも組み合わせせるための加工を施すなど、非常に凝った構造となっている。。しかし、工事の施工段階では必ずしも設計時の意図通りには構築しきれなかつたらしく、各所に修正を施しつつ仕上げられたものようである。



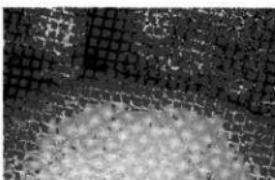
a. 羨道天井石の後と玄室前壁のくりこみ



b. 玄室天井石内面の家形の加工痕



第8図 向山1号墳石室模式図



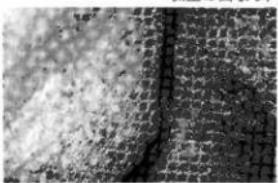
c. 石棺の小口石を床石にかける



d. 奥壁のくりこみと側壁の面取り、排水



f. 羨道側壁を床石にかける

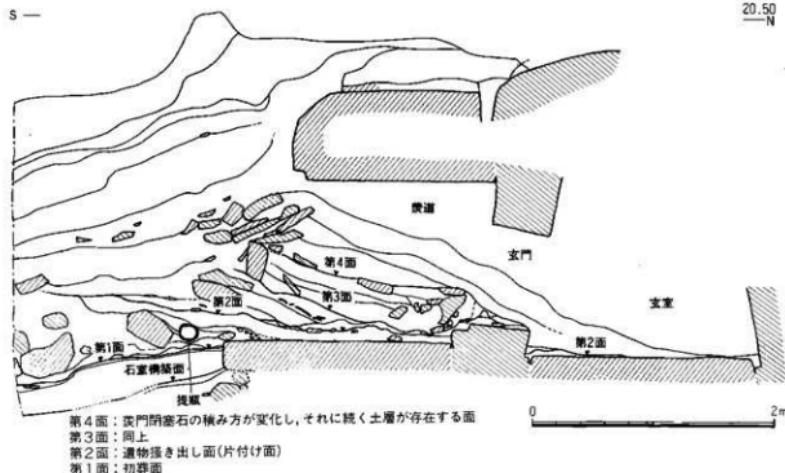


e. 前壁のくりこみと側壁の関係

### ★前庭～石室内の堆積土と遺物の出土状況

平成6年度に前庭部の東半分が渓門の閉塞の途中まで調査されていたので、とりあえず閉塞石の下面の七層まで下がたところ鉄鏃の断片が出上したのでこの面でとめ、西半分に堆積した層を順に除去していった。縦断面も横断面も非常に整然とした土の堆積状況が見られ、盗掘などの痕跡は全くなかった。鉄鏃出土面までの各層には子持瓢の小片がかなり含まれていたが、それ以外の遺物はなかった。鉄鏃出土面に達すると刀の吊金具、馬具の一部、鉄鏃、木片（刀の鞘か）などが発見され、追葬面と考えられた。渓門の閉塞もこの面で行われていたので、渓門の閉塞石を取り外しつつ渓道内の堆積土との関連を見て行った。その過程で閉塞石積み方が変化し、渓道に続く堆積土が面として認められるものが2面ばかり（第9図中の第4面と第3面）認識できた。出土遺物はなかった。

66個にのぼる渓門閉塞石をすべて取り払い、鉄鏃出土面（第2面）を追いかけて玄室まで調査を行った。渓道部では前庭の鉄鏃出土層と同様の土層であるが遺物を含まない層が床石直上に堆積しており初期の流入上であると考えられた。玄門の閉塞石はこの上に立て掛けられている。玄室内では火を焚いたらしく、大量の炭が見つかり、床石が焼けていた。鉄鏃や刀、弓などの遺物はバラバラの状態で炭の中や床石の割れ目、玄門上、渓道部などから見つかった。石棺内には流入土のみで遺物はなかった。第2面は追葬面と考えていたが追葬に伴う副葬品は見当たらず、ただ片付けただけの状況と思われる。玄門はこの面で木蓋を使い石で押さえておそらく2度目の閉塞をしている。前庭部の第2面の下には22個にのぼる15~70cm大の石が埋まっており、須恵器4点が一部欠けた状態で石のそばや間から出て来た。これらの石は前庭の両側壁から崩れ落ちた状態のまま埋まっており、副葬品を片付けた時の進入時に前庭を掘削した際、上庄で崩落したので埋め直して石室に入り、その埋土の上に初期



第9図 向山1号墳前庭～玄室土層断面図

流入土と遺物と一緒に掻き出したものである。これらの石を取り除くと進入時の掘削面が検出され、その一部はより下層に埋まつた須恵器の上面まで達していた。前記の須恵器の破片がこの面で見つかったので、進入掘削時に引っかけて掘り出したものを崩れ落ちた石を埋める際に置き直したものと考える。

掘削面より下の埋土を取り除くと凝灰岩の割りくずを多量に含んだ縮まりのある面（第1面）があり、その上で須恵器24個と鉄釘4本が見つかった。須恵器はほぼ完形を保ち、その場で倒れた状態のものと同一器種をまとめて置いた状態のものがある。鉄釘の出土位置は不整な四辺形をなし、床面よりやや浮いている。

この床面より下は立ち割り調査を行った。第1面から約40cm下に凝灰岩の割りくずを大量に含む層がもう1層あり、羨道床石の下面でなくなっている。これが石室の設置面である。羨道床石と側壁石の下には20~30cm大の石を敷いていることを一部で確認した。



第10図 向山1号墳前部遺物出土状況

★前庭～石室の調査の経過



1. 塞門閉塞状況



2. 墓室石石組の変わり目と狭道(第4面)



3. 同 左(第3面)



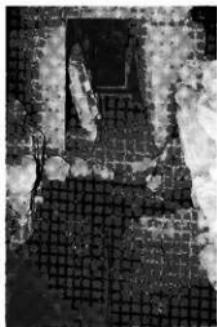
4. 副葬品焼き出し面(第2面)



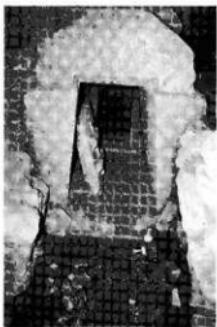
5. 同左をたちわりする



6. 落ち込んだ前庭側石



7. 振き出しに進入した時の振削面(初葬後の埋土の残存面)



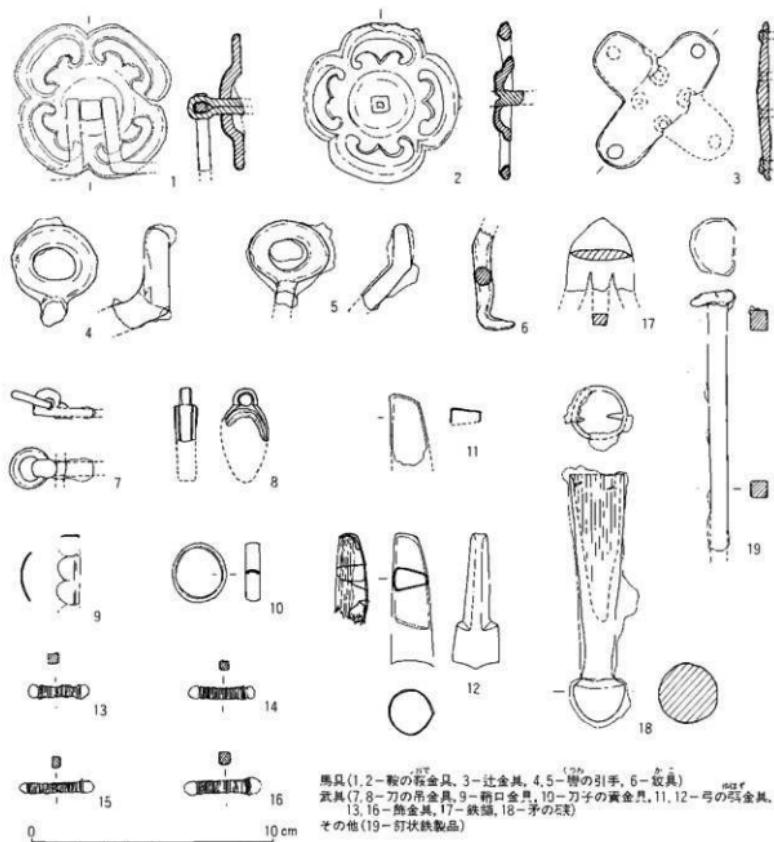
8. 初葬面の遺物出土状況 (第1面)



9. 完掘後の前庭～石室

### ★掻き出された遺物

門状の陽刻をもつ玄門閉塞石の置かれた初期流入土の上面において、玄室から掻き出された遺物のかけらが多数発見された。副葬品には馬具、武器、玉、須恵器があり、他に鉄釘が数本ある。馬具は鞍金具(鞍の金具)、辻金具、飾金具、轡の引手壺や鉗などがあり、武器は銀製又は銀張の刀の吊金具、鞘口金具、刀子の貢金具、弓の掛金具、飾金具、矛の石突、鐵鎌などがある。玉は琥珀製のものが1個出土した。またこれらの遺物を出土した土を洗浄した結果、1~2mm大の金箔のかけらが相当量見つかった。これらの遺物からすると埋葬当初にはかなりりっぱな副葬品が納められていたことが推察される。



第11図 馬具・武具実測図



馬具—鞍の軽金具



馬具—辻金具他



馬具—嚙の引手亞



馬具—鞍具



矛の石突



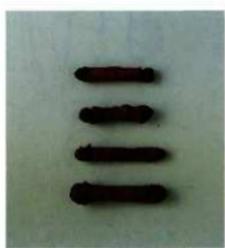
刀の鞘口金具、刀子の責金具他



刀の吊金具2種



弓の軽金具



弓の飾金具(?)

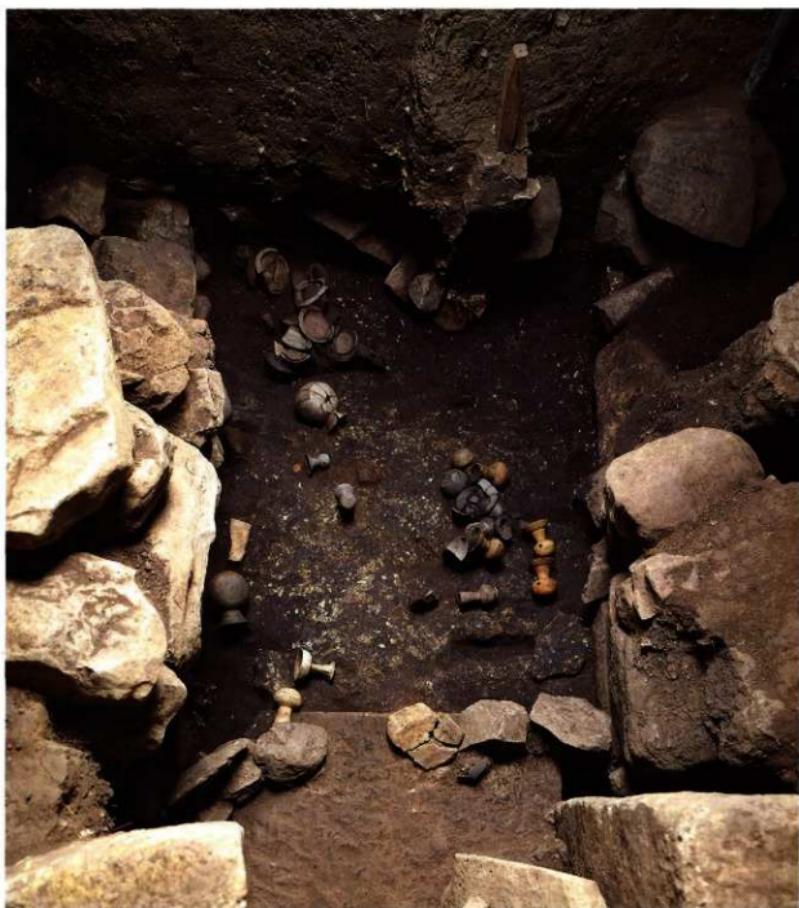


鐵 簏

### ★前庭部初葬時の遺物

前庭部の初葬面は凝灰岩の削りくずが一面に散らばった跡があり、その直上から墓前祭祀に使用されたと考えられる須恵器と木質の付着した鉄釘が発見された。須恵器は脇6個、長頸壺5個、短頸壺2個、壺1個、提瓶4個、有蓋高杯7個、蓋2個があり、このうち2回目の進入時に擾乱されて動いた4個体以外は原位置を示すものである。鉄釘は木の容器か台のようなものが存在したことを示唆している。

地形に制約されて調査できなかった前庭の続きにはまだ多くの遺物が埋まっていると思われる。





甌



壺



長頸壺



提瓶



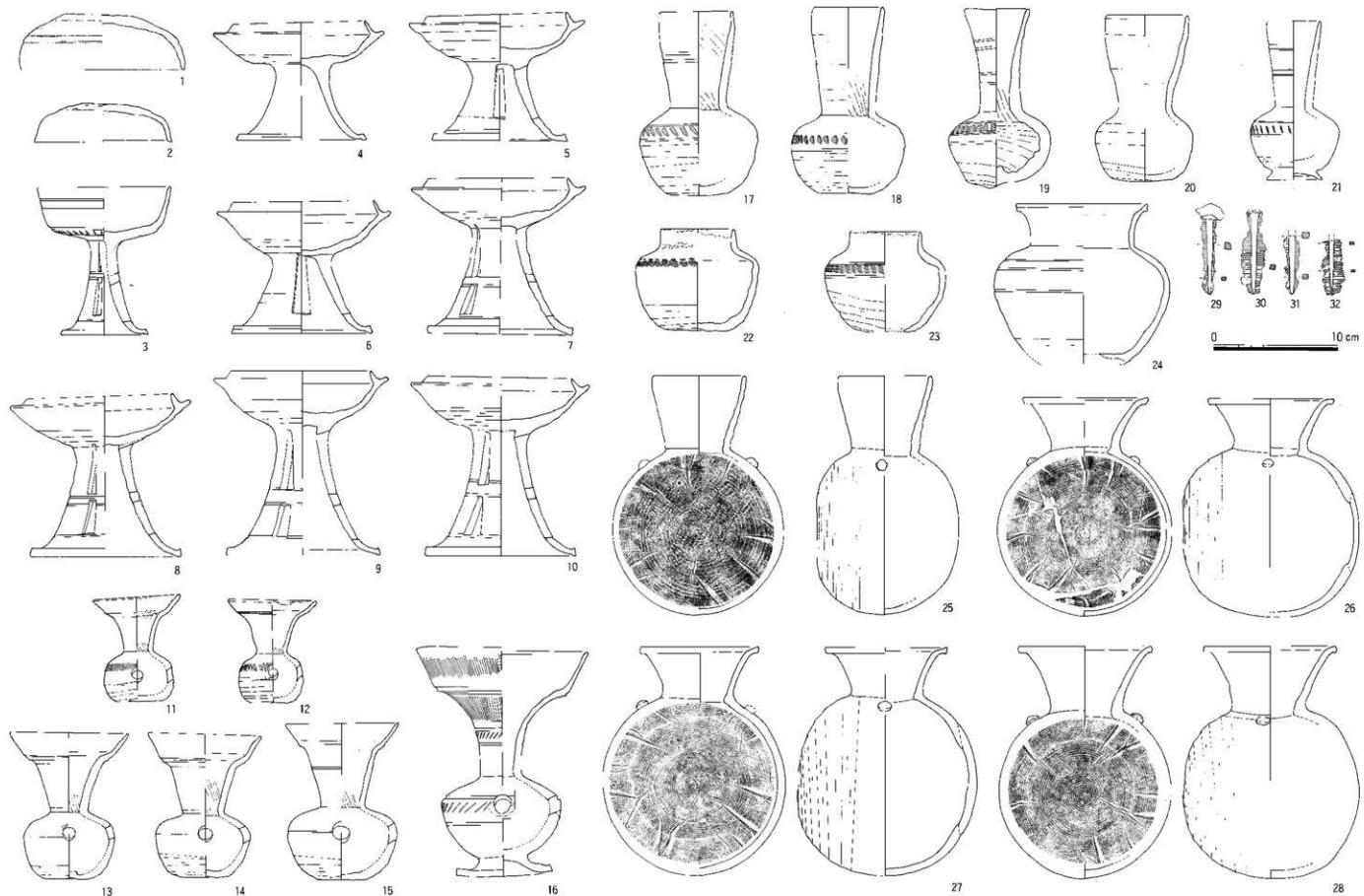
有蓋高坏



高坏



蓋



第12图 向山1号墓前庭部出土遗物实测图

## 2号墳の調査

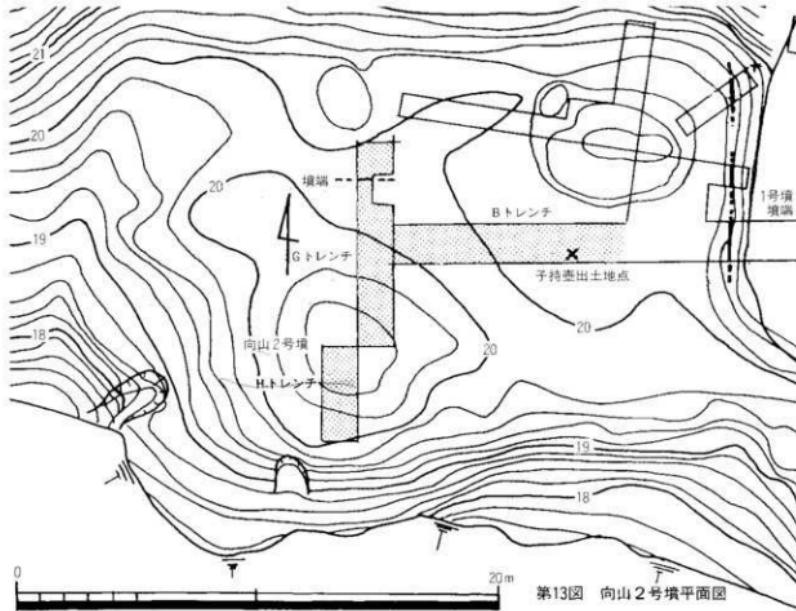
調査当初は3号墳と呼称していたが、2号墳としていた遺構が古墳ではなく後世の盛土であったため、3号墳を2号墳と改称することにした。

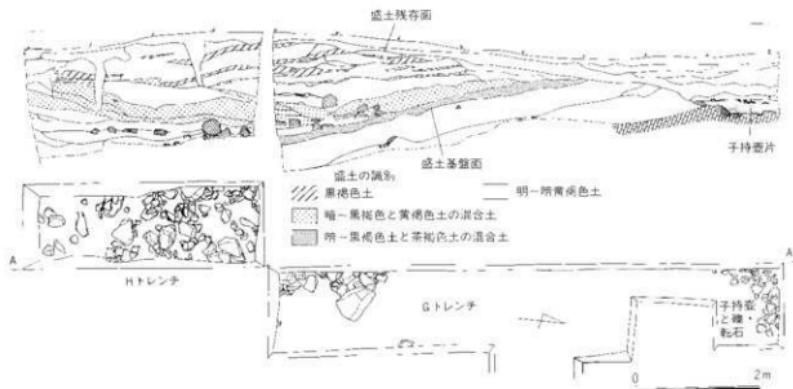
分布調査時点では現存マウンドの西北に連なる小マウンドを含めて前方後方墳と考えていたが、調査前の地形測量の結果、西南部分の地形の残存状況からすると方墳の可能性が高いと考えられ、第13図のようなトレンチを設定して調査を行ったものである。

Gトレンチでは現存マウンドの中心杭から北へ6.5m地点で墳裾と思われる土層の変化が見られ、その外側（北側）に子持壺の破片がまとまって出土した。盛上はいわゆる黒ボクと呼ばれる土層を基盤にし、中心杭付近で2m弱の高さがある。黄褐色系統の粘質土を上体とし黒褐色系統の粘質土と互層状に積み上げて築成している。盛土の下部には10~60cm大の礫・転石がまとまって発見された。

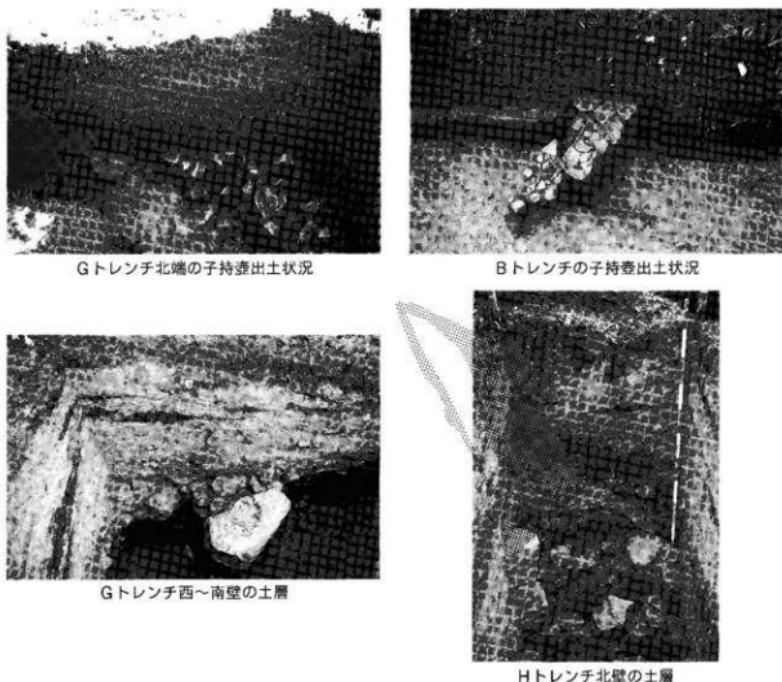
Hトレンチにおいても盛上はGトレンチと同様の状況を示し、盛上の下部には多数の礫・転石が存在した。G、Hトレンチの南北壁の上層は一様に東に向かって傾斜しているので、上体部があるとすればHトレンチの西側ではないだろうか。

Bトレンチでは2号墳南北軸より東へ7m地点で盛土がとぎれ、そこから2m離れたトレンチ壁沿いに子持壺が1個体口縁を東北に向けて倒れているのが発見されている。



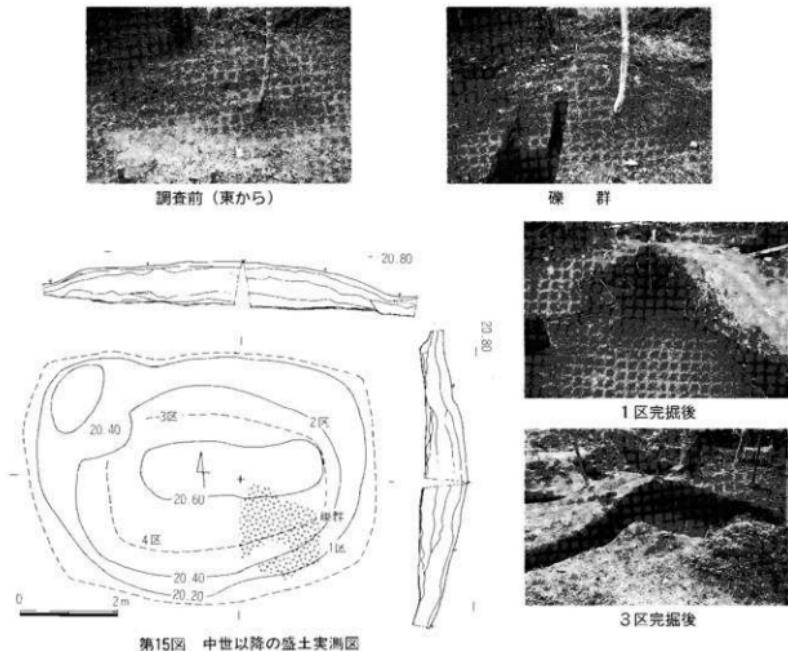


第14図 向山2号墳Gトレンチ・Hトレンチ実測図

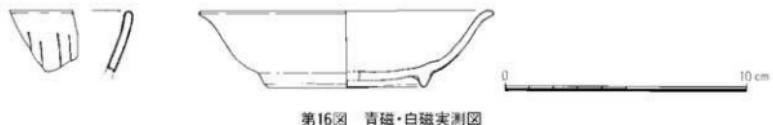


## その他の調査

当初2号墳と考えていた隅丸長方形を呈するマウンド状の高まりを調査したところ、古墳ではなく中世後期以降に作られた遺構であることがわかった。盛土は東西7m、南北5mの範囲に長方形に施され、現存の高さは90cmである。調査前、1区の表土上には荒神さんの祠が祭られていて周辺にはかわらけや小さな礫などが散乱していた。表土中からは4~20cm大の礫が一面に検出され、礫の上や間からかわらけの破片が見つかった。第2層以下盛土の基盤面に至るまで他の遺構は検出できなかつたので、この盛土は表土中の礫やかわらけに関連したものではないかと考えられる。盛土中及び基盤面以下の土層から16世紀代の中国製青磁の小破片と白磁皿が出ている。



第15図 中世以降の盛土実測図



第16図 青磁・白磁実測図

## 小 結

### 1号墳について

〔墳丘規模と形態〕東西約32m、南北20m以上の大型方墳で二段築成の可能性がある。

〔墳丘基盤〕丘陵南向斜面を傾斜を生かした形で斜めにカットし、さらに石室の後方6m地点を逆L字状にカットしている。ここで土師器と青メノウが見つかっており、基盤上の祭祀を行ったのではないかと考えられる。石室の掘り方は裏込め石の付近にあるはずであるが、未調査におわった。

〔盛上〕石室の壁石を立てて裏込め石を置き、黒褐色系統の粘質土を壁石上端近くまで積んだ後天井石を乗せ、石の合わせ目を白色粘土で目張りをする。さらに暗茶～黒褐色土を天井石の所まで積み上げ、それより上部は黄褐色系統の土を上体にし黒褐色土と交互に盛って築成する。

〔外部施設〕古墳の裾付近から相当量の子持壺の破片が出土しており、本来古墳の周りには子持壺が多数立て並べられていたものと考えられる。円筒埴輪と同様の用い方か。

〔内部主体〕玄室、羨道、前庭からなる石棺式石室で南に開口する。玄室左壁に沿って石棺を組み込む。玄室、羨道とも各壁、床、天井は凝灰岩の一枚の切石で構成される。

〔副葬品〕かき出されてすべて細片であるが、馬具、武器、玉、須恵器が見つかっている。

〔墓前祭祀〕初葬時、前庭部において多數の須恵器と木製の台又は容器を用いて祭祀を行ったものと考えられる。羨道天井石の両脇と少し外側には子持壺が立てられていたようである。

〔築造時期〕前庭部出土の須恵器などの年代観からすれば6世紀末頃と考えられる。

〔埋葬回数〕1ないし2回。2回目の進入時に初葬の副葬品をかき出し、玄門と羨門を石でおさえて閉塞しているが、この時の副葬品は1点もなかったので埋葬を行ったかどうかは確定できない。どちらかといえば片付けただけの可能性が高いと思われる。

〔位置付け〕墳丘規模、石室の作り、副葬品などから見て首長クラスの人物の墓とみられるが、近隣の茶臼山のふもとには前方後方墳では西日本最大級の山代「丁塚や大型方墳の大庭鶏塚や山代方墳、永久宅後古墳」という極めて注目すべき「山代・大庭古墳群」があり、今後はこの古墳も含めて検討される必要がある。

### 2号墳について

上部部の位置や形態は確認できなかったが、1号墳とよく似通った盛上や礎・転石が確認され、裾部付近から子持壺が倒れ込んだ状況で出土していることから、1号墳と並んだ古墳が存在する可能性が高いと考えられる。

向山古墳群発掘調査概要報告書

1996年3月

発行 松江市教育委員会

印刷 梅谷口印刷  
松江市梅衣町89

